『家庭科教育』第66巻第7号 1992年6月号 94～97ページ

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎小伝

第二部 『家事及裁縫』とともに (3)

佐々木 享
（名古屋大学教授）

森本厚吉の「生活改善」運動の実践

森本は札幌農学校を卒業後アメリカに留学、帰国後に札幌農学校を改編した東北帝大農科大学の助教授（次いで一九〇八年に教授）となった。一五年から二年間再びアメリカに留学、一六年にはジョンズ・ホプキンス大学からドクトル・オブ・フィロソフィの学位を取得した。前述の社会政策学会での報告は、この学位論文を基調としていた。二〇年には北大在職のまま自ら文化生活研究会を組織して東京にその事務所を開設、雑誌『文化生活研究』を刊行するなど、充実した文化生活を目指す生活改善運動に乗り出した。二二年には財団法人文化普及会を設立、この活動のため二四年には東京に転居した。震災後の二六年には内務省の低利融資の助成を得て本郷元町に五階建ての文化アパートメントを建設、その経営にあたった。（このアパートは戦後旺文社の手に渡り、一九八七年まで日本学生会館として経営された。現在はその跡に、一九階のセンチュリ・タワービルが建っている。）

一九二七年には、森本は生活改善のための女子教育を標榜する女子文化高等学院を創設、二八年にはこれを母胎として財団法人女子経済専門学校を創設しその理事長となった（校長は新渡戸稲造）。三一年三月に退官するまでは北大教授の職にあったのだから、優れた友人や妻静子の力添えがあったとはいえ、その活動は超人的であった。なお女子経済専門学校は四四年に東京女子経済専門学校と改称し、戦後は東京文化短期大学となっている。森本は五〇年に逝去した（森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』一九五六年、『東京文化学園五十年史』一九七七年を参照）。

森本の『家事及裁縫』への寄稿は管見の限り「家事教育の改善」（第四巻第五号）、「不景気と婦人経済問題」（第四巻第十一号）、「家事経済の二方面」（第十巻第四号）の三編である。後者において森本は、経済化の重要性がようやく自覚され、従来の「家事」Domestic Scienceは「家事経済」Domestic Economyとすべきだとする観念が強くなってきたとしている。経済化とは経済主義化であり、家事経済においては、最少の勤労または収入をもって家事を営むという第一の面と、

同一の収入あるいは支出で最大の効果を上げるという第二の面とが重要である。節約勤倹という第一の面は日本婦人には備わっているけれども、今後はたんに節約に心掛けるだけではなく、合理的な支出で最大の効果を上げる知識が必要となる、というのが森本の主張であった。

官制の生活改善運動

ようやく日本資本主義が成熟してきたのに対し、国民一般の社会生活はなお旧社会の古い絆に縛りつけられているので、これを新時代にふさわしく改善しなくてはならない、という意味での生活改善の声も強くなってきた。一九二〇(大正九)年に文部省主導で結成された財団法人生活改善同盟会の運動はこの動向を象徴している。森本のような学者も関係していたとはいえ、生活改善はいまや官制の運動にもなっていた。高等小学校における家事科の成立(一七)、高等小学校教育の充実策と家事の女児必修化(二六)も、この流れに沿った施策であったと言える。戦後恐慌によって露呈した日本資本主義の矛盾が背景にあったことも見逃せない。

しかしここでは、『家事及裁縫』第一巻第六〜九号に寄せられた棚橋源太郎の「生活の改善」という論策に沿って、この時代の生活改善論の論点を素描してみる。彼の改善論が欧米諸国の国民生活調査を裏づけとしている点は、森本の場合と似ていた。

棚橋源太郎の生活改善論

棚橋の問題意識は、第一次世界大戦がもたらした時代の変化とともに、「過般の大震災は、偶々我国民生活の様式に幾多の欠陥あることを暴露し」、生活改善が急務であることを示した、という点にある。棚橋の勧める生活改善策は、当然ながら衣、食、社交、礼儀等の多岐にわたっていた。

棚橋の生活改善論は、まず「生活費に一定の予算を設け、其の範囲内で生活するようすめることから始まり、陰陽五行からくる迷信や方位の吉凶観念の排除など、生活を科学的、合理的にするという基調が強調されている。

衣服については、わが国では男女ともに余分に持つ傾向があり、たぶん三分の一か二分の一に節減できるはずで、その節減できる衣料を全部合わせてみると一国の経済という点でも重要なことが分かるはずだとする。これは、棚橋の生活改善論の土台が中流家庭に置かれていたことを物語っていたと言えよう。そして衣装については、帯という「無用の長物」や、下履きをはかない婦人の和服に批判の矢が向けられる。洗い張り、裁縫に毎年多大の手間を費やさねばならぬことは時間の浪費ともいうべく、なるべく「出来合い服」にすべきで、そのためには今後は男女共に洋服に改めるべきだという。長年の習慣があるから強制はできないけれども、その努力が必要だという。棚橋は裁縫教育にも言及し、女性が裁縫に費や

す時間を減らすだけでなく、とかく型にはまりがちな裁縫教育をもっと自由にすべきだとしている。

食生活についての棚橋の改善論は、日本の食事の滋養と味が意外に貧弱で、かつ料理法が非科学的だという批判に始まる。淡泊で、栄養についての配慮がなく、脂肪分が不足がちである。栄養に配慮すれば無闇に大食する必要はないともいう。食生活に関しては、供応・宴会の席でむやみに杯を勧めたり、暴飲暴食になりがちなこと、調理など食品の扱い方や喫食法が意外に不衛生なことをもいましめている。

棚橋の生活改善論は、形式一辺倒の物品の贈答、時候の挨拶、むやみに多い宴会等の簡素化、虚礼虚飾の廃止などの社交礼儀の改善にも説き及んでいる。

社会生活の面では本人同士が顔も知らないうちに家同士の間で成立してしまう結婚の改革、子女の結婚のためとはいえ見えのための過大な支出、新婦が宴席で幾度も席を離れる衣装換えなどは虚栄の甚だしいもので笑止の至りという。

時間の励行は生活改善の根本であると繰り返し強調され、最後は、通夜葬式の行事も華美に過ぎると結ばれている。

棚橋が提起した生活改善の諸課題は、西欧人の生活に関する豊富な知見に裏づけられた具体的なものばかりであったが、他面で、社会科学的洞察に欠けるうらみがあり、お説教調が前面に出ていたことは否めなかった。

家事教育改善の課題と棚橋源太郎

ところで日本近代教育史に巨大な足跡を残した棚橋源太郎（一八六九～一九六一年）については、今日なおその業績にふさわしい評価が与えられていない。例えば『現代教育学事典』（一九八八年）の棚橋の項は、全二六行中二四行を理科教育近代化に果たした彼の業績に費やし、他の業績については、「大正期以降はもっぱら博物館の研究とその教育に従事した」と述べているにすぎない。これでは「ご逝去されるまで名実ともに日本の博物館界の第一人者」であり（宮本馨太郎『棚橋先生の生涯と博物館』一九六二年）、「博物館学の父」、「博物館の育ての親」と言われる棚橋の実像は見えてこない。さいわいに、伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』全二一巻（一九九一年、大空社）の中に博物館関係の棚橋の主要著作が収録されたので、今後の研究の進展が期待される。しかしここでは、棚橋のもう一つの活動分野だった家事教育や生活改善問題についてだけ述べよう。

棚橋は早くから欧米の家事教育に注目しており（『欧米に於ける家事教授の実際』『教育研究』第九十六号、一九一二年三月）、また雑誌『家事研究』創刊号（一九二〇年四月）では欧米の家事教育の実情を紹介するとともに、「合理的な新生活を創造する」ための家事科の地位向上を力説した。これらについては野田満智子が注目したところである（「棚橋

源太郎による小学校家事教育の模索」『日本家庭科教育学会誌』第二十九巻第一号、一九八六年八月など）。また棚橋は、たんに理科教育の研究者として家事教育に関心を持っていただけでなく、附属小学校で家事教授を自ら担当した経験も持っていた（『教育学術界』第九巻第一号、一九〇四年五月）。

文部省が東京教育博物館を会場として一九一八（大正七）年十月から翌年一月まで開催した家事科学展覧会、同じ会場で一九年十一月から翌年一月まで開催した生活改善展覧会が好評を博したことは、日本女子大学校が協力したこともあって家事教育史上によく知られている。棚橋は一四（大正三）年より東京教育博物館長事務取扱となり、次いで一七年より文部省督学官となり東京教育博物館長を兼ね、二一年からは館長専任となっていた。棚橋はこの二つの展覧会の責任者だったわけである（棚橋「衣食住の科学的研究」『斯民』第十四編第一号、一九一九年一月、「生活改善の諸問題」、同上誌第十五編第二号、一九二〇年二月、を参照）。その後二五年一月から一か年にわたってドイツ、フランスに留学し、彼地の生活の事情と博物館を調査したその成果は、「最近独仏の国民生活に就て（一）―（五）」『斯民』第二十二編第五～九号（一九二七年五～九月）に報告されている。『家事及裁縫』に執筆した当時の棚橋は、いわば生活改善研究に油が乗っていた時期であった。

考現学―生活研究の新方法―の誕生

『家事及裁縫』誌が創刊された一九二七年の十月、東京は新宿・紀伊国屋書店の二階で「しらべもの（考現学）展覧会」なる奇妙な展覧会が催された。主催は今和次郎ほか四名。財貨が現に使用されている場所における現代人の生活すなわち行動、住居、衣服などの記録を採集し分析するという考現学がこうして呱呱の声を上げた。考現学の守備範囲は広いが、例えば今和次郎は、二年前の一九二五年五月に銀座を歩いていた男性の洋装は六七％、女性のそれは一％にすぎなかったなどの「東京銀座街風俗記録」を、『婦人公論』七月号に発表している。「現代の風俗の記録として、十年、百年後の人々に、この私たちの仕事が残される可能性があることを思うとさらに愉快になる」と今はこの論文の中に書き遺している（『今和次郎集1・考現学』一九七一年、ドメス出版、五六頁による）。小学生の衣装は卒業写真を調べる方法もあるけれども、大人のそれについてはほかに適切な方法が見つからない。百年待つまでもなく私たちは近代日本の生活史上の事実を知ろうとする時、これらの考現学の記録に大いに世話になっている。驚くべき卓見である。

考現学は、生活研究の方法でもあった。実際、今和次郎は後年家庭科学研究所長となり、『家政学』の著書も書き、やがてよく知られているように生活学を提唱する。